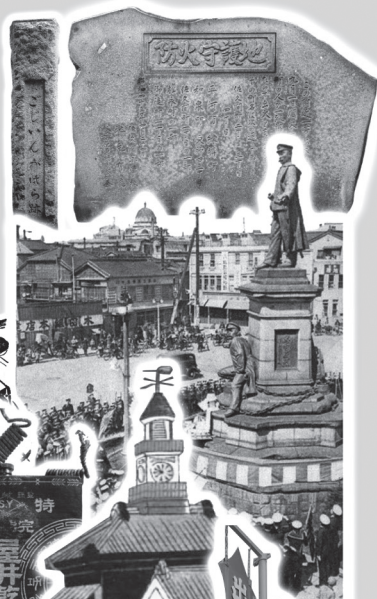


発掘！ 神田の物語

後藤 禎久
Yoshitsa GOTO



Solia Poppy

目次

神田の物語	千代田区長 樋口高顕	vi
1	イコン画家・山下りん	2
2	松浦武四郎と「一畳敷」	4
3	江戸でただ一軒の纏屋 まといや	6
4	秋葉ヶ原のチャリネ大曲馬	8
5	神田五軒町のお殿様・大関増裕	10
6	米騒動と昌平橋の簡易食堂 (前編)	12
7	米騒動と昌平橋の簡易食堂 (後編)	14
8	神保町の「神田すずらん通り」物語	16
9	神田名物だった「京屋の太時計」	18
10	幻の東京オリンピックと駿河台の競技場	20
11	日本最古の「篠原幼稚園」	22
12	神田名物「今川焼」	24
13	五十稲荷神社の由来と縁日	26
29	侠客「奥津万吉」と寄席「市場亭」	58
30	終戦直後の神田 (前編)	60
31	終戦直後の神田 (後編)	62
32	豆腐で火を消した町	64
33	明治のイベント会社「有馬組」	66
34	東京で最初の西洋料理店	68
35	ニコライ堂物語	70
36	「生首」を写生する少年 (前編)	72
37	「生首」を写生する少年 (後編)	74
38	重量挙げ発祥の地	76
39	霊柩車の元祖を作った男	78
40	神田はカボチャの名産地	80
41	義憤に駆られた神田っ子	82
42	神田駅小史と岡本太郎の壁画	84
43	生涯に八十一人を斬った男	86
44	関東大震災と神田明神 (前編)	88
45	関東大震災と神田明神 (後編)	90
14	神田と鶴沼 くげぬま を結ぶ「賀来神社」	28
15	幻の「お玉ヶ池」	30
16	神田旅籠町の名物「太々餅」	32
17	三崎三座と火消しの親分「重 しげ の井」	34
18	「能勢の黒札」と狐憑 きつねつ き	36
19	「ラジオ体操会」発祥の地	38
20	日本で最初のアスファルト道路	40
21	学習院発祥の地・神田錦町 (前編)	42
22	学習院発祥の地・神田錦町 (後編)	44
23	神田明神の「歳の市」	46
24	中間 ちゅうげん から大出世した男の話	48
25	「よ組」の火消し・日本銀次	50
26	ペンキ画の元祖「キカイ湯」	52
27	東京で最初の養護学校	54
28	神田っ子と水戸家の大乱闘	56
46	スズムシ売りの元祖は神田にあり	92
47	神田から生まれた「若き血」	94
48	名物寄席「立花亭」遺聞	96
49	日本の野球発祥地は神田だった	98
50	神霊スポットになった「将門塚」	100
51	寝小便から「心学」を学んだ中沢道二	102
52	観音坂の大石が見た歴史	104
53	古着屋のイメージを変えた「正柳組」	106
54	筋違御門の仇討ち	108
55	平賀源内が住んだ神田の家	110
56	戦前・戦後の「神田祭」 (前編)	112
57	戦前・戦後の「神田祭」 (後編)	114
58	乾電池を発明した男	116
59	ニコライ堂の廃虚でバイオリンを弾く少年	118
60	お供えの半次郎と迷子石	120
61	オートバイに夢を託した男たち (前編)	122
62	オートバイに夢を託した男たち (後編)	124

63	酒と縁が深い稲葉家の辻番所……………126	80	日比谷事件と万世橋の山車展示……………160
64	御防講の講元・中村末吉と大纏……………128	81	神田が発祥の「改良風呂」……………162
65	埋めては掘り返された龍閑川……………130	82	神田っ子は饅頭好き?……………164
66	パリ社交界の名士「バロン・サツマ」……………132	83	敵を討つなら護国寺院ヶ原……………166
67	お玉ヶ池の種痘所……………134	84	今は昔、火消し屋敷も夢のあと……………168
68	神田っ子の産湯は水道の水……………136	85	憲法発布より絹布の法被がほしい!……………170
69	こんなところに「震災記念」の碑……………138	86	削り取られた太田姫稲荷神社……………172
70	多町市場と将軍上覧のカボチャ……………140	87	車か伝統文化か、迷惑なのはどっち……………174
71	千歳飴授与の元祖・神田明神……………142	88	東京一の繁華街と広瀬中佐の銅像……………176
72	神田餌鳥町から小判がザクザク……………144	89	宮本公園と神田の恩人・三谷長三郎……………178
73	「寒中祓がまん会」のルーツ……………146	90	東京で最初の映画館……………180
74	「神田大火」で活躍した力士たち……………148	91	明治十七年の神田祭を撮った男……………182
75	「駿台荘」と名物女将……………150	92	神田明神の神鹿の脱出劇……………184
76	獅子舞の元締め・新井喜三郎……………152	93	神田の知能犯とその顛末……………186
77	一ツ橋界限と国民体育館……………154	94	「幾世餅」の元祖争い……………188
78	幻の幽霊狩り……………156	95	出世稲荷神社にまつわる物語……………190
79	西瓜糖で有名な「万惣」……………158	96	伝説の男、神田市場の「いせ万」……………192

97	素人相撲の元締め・神田の髻達磨……………194	112	須田町名物ウサギ料理……………224
98	流行り病と神田祭……………196	113	神田にあった珍商売……………226
99	夢に出てきた鐘馗……………198	114	通信社の元祖は神田にあった……………228
100	湯島聖堂の盗難の歴史……………200	115	白酒の元祖・豊島屋と力持ち「鬼熊」……………230
101	皇居内の緑陰学校……………202	116	大失態を演じた堀家の辻番所……………232
102	史跡に指定された町と草分稲荷……………204	117	淡路町・幽霊坂辺りの今昔……………234
103	多町市場の「江戸天王祭」……………206	118	万世橋駅から誕生した「交通博物館」……………236
104	幻の常夜灯と大銀杏の祟り……………208	119	旅籠町の名聞家・馬具兼……………238
105	万世橋は永遠に不滅です……………210	120	ペテン師と神田明神の神罰……………240
106	無銭飲食をしたニセ新聞記者……………212	121	ハローワークの元祖は神田にあった……………242
107	地上げされた出世不動尊……………214	122	流行の発信地だった丹前風呂……………244
108	駿河台の岩崎邸と軍艦山……………216	123	神田錦町のランドマーク、学士会館物語……………246
109	新しい氏子町と「猿田彦」の山車……………218		
110	地下に埋まっている神田の文化財……………220		
111	紆余曲折で誕生した「神田橋公園」……………222		
			あとがき……………248
			後藤禎久……………248

神田の物語

樋口高顕

今、私たちが眺めている街は、人々の弛みない営み、その変遷の一場面なのだろう。表皮を捲れば、積み重ねてきた歴史の地層が現れる。神田の地には、中世より賑わう町場や湊があり、家康公の入府以来三百年に亘る江戸の町の拡張と発展があった。そして明治新政府により東京へと名と体を変えてからは、大震災と帝都復興、大戦による空襲と敗戦、その後の占領期を経て高度経済成長にバブル期と、連続と断絶を繰り返しながら、その折々の市井の人々が悲喜こもごもの物語を織り込んできた。だが、街の更新は果てしなく、情報が奔流する令和の都市空間は、来し方を顧みる暇を与えてはくれない。本書は、忙しなく生きる私たちにとって神田の過去と現在を繋ぎ、未来を照らす一書となろう。

本書『発掘！神田の物語』には、平成二六年十月から約九年間に亘り『月刊 神田画報』（令和七年三月終刊）に連載された珠玉のエピソードを基に、大幅な加筆修正と新たな物語が加えられている。大岡越前守が認めた江戸で唯一の纏屋、神田祭の山車行列と水戸家の大乱闘の顛末、富士山のペンキ画が初めて描かれた銭湯、関東大震災の火を豆腐で消した逸話など、多彩な一二三編が綴られている。その鮮やかな筆致は往時の情景を浮かび上がらせ、軽妙洒脱な語り口は神田の路地を歩むが如く心地よい。

なるほど、著者の後藤禎久氏は生粋の神田っ子であり、明治生まれの父上は神田多町で大工の棟梁として名を馳せ、神田明神の宮鍵講としても江戸の粋を体現した御仁であったと聞けば得心がいく。町人文化を受け継ぐ著者は、定年を機に国立国会図書館に通い詰め、当時の新聞や出版物を渉猟した。すべての物語に裏付けが取れているということも付しておく。

地に根差した物語を紡ぐことこそが、高度に成熟した街を持続的に発展する都市へと再生する鍵であると私は確信している。SNSやAIの活用が加速し、日々膨大な情報が刹那に行き交う現代においては、口碑や伝承に委ねず、紙片に書き留め、校正を経て出版されたことに大きな意義がある。本書に刻まれているのは江戸から明治、大正、昭和、そして令和へと続く神田の物語だ。懸命に生きた人々の営みと都市のアイデンティティを後世に伝え、新しい時代への希望となるだろう。

喧しい日常に一寸一服。頁を繰れば、古き佳き神田の粋な調子が聞こえてくる。
発刊を心より言祝ぐ。

令和七年 十月

——千代田区長——

凡 例

- 一、本書は平成二六（二〇一四）年十月から令和五（二〇二三）年十一月まで、一〇九回にわたり『月刊 神田画報』（令和七年三月終刊）に「すいばもんど酔馬主水」のペンネームで連載した「昔むかしの神田探訪」を基に適宜加除修正し、また、新たな物語を加えて整えた。
- 一、本書掲載順も基本的には同「昔むかしの神田探訪」に準じている。
- 一、新聞記事や出版物からの引用は、逐一原典に当たっているが、表記については原文ではなく大意を示した。よって原文の趣旨を損なわないように注意しながらも、著者の感覚で文章を現代風に読みやすく整えた箇所がある。
- 一、年号表記については主に和暦を用いて、原則的に西暦を補ったが、紙幅の関係等により西暦を略している箇所がある。
- 一、本書を、神田を愛するすべての人々に捧げる。

後藤 禎久
Yoshinisa GOTO

発掘！

神田の物語



1 イコン画家・山下りん

神田の歴史を語る上で女性の登場は決して多いとは言えない。ところが気づかないだけで、知る人ぞ知る芯の強い女性がいた。日本の初期の女性洋画家で、神田駿河台のニコライ堂と縁が深い女性だ。

幕末の江戸が壊滅的な被害を受けた安政の大地震から二年後の安政四（二八五七）年、現在の茨城県笠間市に下級武士の子として一人の女の子が誕生した。兄と弟にはさまれて育った「りん」は読み書きが苦手で、日本画や浮世絵を見ているほうが楽しかったという。

その「りん」が、何が何でも絵の勉強がしたい一心で家出同然に笠間を抜け出したのが明治五（一八七二）年、十五歳の少女の時だった。旅館に泊まる金もなく、軒下に身を潜めて約一二〇^キの道をひたすら歩き通したというから驚きだ。すぐに連れ戻されてしまうが、翌年には家人を説き伏せて再び上京、浮世絵師や洋画師に入門して本格的に絵を学んだ。

二一歳のときには友人のすすめでロシア正教会の洗礼を受けて、「イリナ」という洗礼名を授けられた。そんな「りん」をサンクト・ペテルブルクの修道院へ、絵画修業の留学に行かせたのは後にニコライ堂を建てるロシア人司教ニコライだった。

明治十三（一八八〇）年十二月、横浜港から二四歳の「りん」が旅立つ。その航海は想像を絶する過

酷なものだった。満足な船室も与えられず、粗末な食事、船員のモラルも低い。そんな「りん」の心を支えたのは西洋絵画への情熱だけだった。やつとのことでサンクト・ペテルブルクにたどり着いた時は、横浜の港を出発してから三ヶ月が経っていた。

女子修道院での生活は、ロシア語を話せない「りん」にとって苦勞の連続だった。そのうえ描かされる絵は「聖画^{イコン}」だけ。自分が本当に描きたい絵とは違うイコン制作は、やむを得ず、続けたらしい。

体調の悪化もあって五年の留学予定を二年半で打ち切って帰国した「りん」は、神田駿河台の教会内のアトリエで三五年間、人知れず聖画^{イコン}を描き続けた。ロシアから戻って八年後の明治二四（一八九二）年にニコライ堂が竣工、三月八日に開堂式が行われた。大勢の参列者に混ざってその式場に「りん」もいた。しかし四〇〇〇人近くの参列者の中で、化粧もしていない三〇代なかばの女性のことを気にとめる人は一人もいなかった。

明治三五年には「りん」が制作したイコン画がニコライ堂内に掲げられたが、その聖画は大正十二（一九二三）年の関東大震災で全焼したニコライ堂とともに灰燼^{かいじん}に帰した。

大正七（一九一八）年、ニコライ堂での生活に区切りをつけて六一歳で故郷の笠間に戻った。以後、「りん」は昭和十四（一九三九）年に亡くなるまで、笠間の自然の中で余生を送っている。

晩年の「りん」は目を悪くして画筆をとることはなかった。お酒が好きで、夕方になると二合瓶を抱えて酒屋に買いに行ったという。「まとめて買っておくと、つい飲んでしまうからね……」と言うのが口ぐせだったとか。享年八三歳。その墓は笠間市の光照寺にある。



58

乾電池を発明した男

普段の生活の中に溶け込んでいる「乾電池」だが、それを発明した男が神田にいたことはあまり知られていない。

乾電池を発明した男の名前は「屋井先蔵」という。文久三（一八六三）年十二月、越後長岡藩の下級武士の長男として生まれた彼は、幼くして父親を病気で亡くしてしまう。この年、時代は「明治」となったが先蔵の苦勞はここから始まった。

十三歳になった先蔵はただ一人上京して、神田旅籠町の有名な京屋時計店に丁稚として住み込むことになる。生まれつき機械が好きだったのでその道で身を立てようとしたが、時計店の主人に酷使されたり丁稚仲間にいじめられたり、些細な過ちのために三日間も絶食させられたこともあったという。

夢を抱いて故郷を出てきたが、身体をこわして一年も経たないうちに故郷の長岡へ戻ることになってしまった。その後、健康を取り戻した先蔵は長岡の時計店に七年間勤め、時計の組み立てや修繕の技術を身につけたが、機械の原理を知るための学力が足りないことを痛感する。

明治十七（一八八四）年、一二歳の先蔵は勉学のために再び東京へ出て来た。郷土出身の代議士、石黒忠直男爵の家に書生として住み込み、夜は神田小川町の物理学校（現・東京理科大学）で勉学に励み、

その一方、職工学校（現・東京工業大学）の受験を目指したが入学試験当日、たった五分の遅刻のために受験できなかった。同じような目に遭った受験生が二五名もいたという。五分の重みを感じたが、当時はラジオやテレビの時報もなく、時計はゼンマイ式で全国一律の正確な時を知る手段がなかったのだ。

受験日の朝の遅刻で先蔵は新しい目標を見つけた。どこの家でも同一の時刻を示す時計を作ろうと決心する。

一年後、電池を電源にしていくつもの時計が同じ時を示す「連統電気時計」を完成させたが、これは全く売れなかった。理由は動力源が「液体電池」で、液体電池は取り扱いが面倒な上に、冬には電解液が凍って使い物にならない、持ち運びにも不便など欠点だらけだった。それならと、先蔵は液体を使わない「乾いた電池」を作ろうと実験を繰り返し続けた。そして試行錯誤の末、ついに「乾電池」を完成させたのだ。

この電池が注目を集めたのは明治二七（一八九四）年に勃発した「日清戦争」だった。極寒の戦地で凍ることなく通信用に使われ、日本軍を勝利に導いたのである。当時、中国やロシアが使っていた電池は電解液が凍結して無線が打てなくなっていたという。先蔵は明治四〇年、神田錦町一丁目に営業所（後の本社）を構えて事業を拡大させたが、昭和二（一九二七）年、六五歳の生涯を閉じた。その葬儀は神田錦町の自宅兼本社で営まれた。

会葬者の中には「世界のナシヨナル」の礎を築いた三二歳年下の松下幸之助の姿があったという。「屋井乾電池合資会社」は後継者に恵まれず、昭和二五年に乾電池工業会の名簿から消えた。



59

ニコライ堂の廃墟でバイオリンを弾く少年

関東大震災（一九二三）で廃墟と化したニコライ堂の中から、毎日のように美しいバイオリンの音が聴こえてくる。この美しい音色に誘われて廃墟の中に入っていくと、一人の少年がバイオリンを弾いていた。この少年はポーランド生まれのルーマニア人、トリーヤ・ポッパという九歳の少年だった。『中央新聞』（大正十三年十一月七日）に載った記事を読んで、この少年に興味を覚えたので調べてみた。

ロシア革命を経て社会主義国家ソビエト連邦が誕生したのは一九二二年のこと。一九二四年春、税関の役人だったポッパの父親は政府から「思想に合わないならロシアにいない必要はない」と宣告された。革命に追われた父親は妻と二人の子供をウラジオストクに残したまま、トリーヤを連れて樺太（からふと）から北海道に渡って来たという。『函館市史 通説編第三卷』（函館市、平成九年）には「大正期は第一次世界大戦やロシア革命によって祖国を離れ、日本を訪れるロシアの音楽家が増えた。

大正十三年八月にはルーマニアの九歳のバイオリスト、トリーヤ・ポッパの演奏会が、函館在住外人社交倶楽部の主催で開催されるなど、祖国を離れた音楽家たちは函館在住の外国人により暖かく迎えられていた」と新聞記事を裏付ける文章がある。

函館を離れて九月二〇日に東京にたどり着いたトリーヤ父子が、駿河台のニコライ堂を頼ったことは

容易に想像できる。しかしニコライ堂は前年の大震災で無残な姿になっていた。同じ敷地内に小さな仮の会堂は完成していたが、本堂は崩れ落ちたままだった。その横で九歳のポッパ少年は、ウラジオストクから持ってきたボロボロの楽譜をみつめ無心に練習をしていた。

そんな境遇でも十月には会員制社交クラブ「東京倶楽部」で、閑院宮殿下の前で演奏をしてお褒めの言葉をいただき（『読売新聞』）、十一月には明治大学メロディ倶楽部との演奏会を報知講堂で行う（『東京朝日新聞』）など各所で活躍したようだ。

そのころ『中央新聞』『読売新聞』などがニコライ堂の廃墟に住むトリーヤ父子を取材している。記者がポッパ少年に「バイオリンとご飯のどっちが好き？」と聞くと、ちよつと首をかしげて、たどたどしい日本語で「バイオリンが好きさ」と答えている。記事は「親子二人は東京で旅費をつくってアメリカに渡り学びたいと言っている」で終わっている。

その後の足取りは調べられなかったが、四年後の昭和三（一九二八）年の新聞に、トリーヤ・ポッパの名前をみつけた。日本を離れたあと「希望通りサンフランシスコで有名な音楽家の教えを受け、両親や兄弟の住むハルビンに帰った」とある。そして昭和三年一月三〇日、横浜着の船で父親といっしょに再来日した。滞在中、日本青年館など各地で独奏会を開催して喝采を浴びた。「ルーマニアが生んだ今年十三歳の天才少年」（『読売新聞』）は七月五日、神戸出帆の「加茂丸」でパリに向かった。同郷の世界的なバイオリニスト、ジョルジュ・エネスクに教えを乞うためだと言った。

その後のトリーヤ・ポッパの名前を見つけることは残念ながら出来ていない。



60

お供えの半次郎と迷子石

夜も煌々と明るい現在の都会では想像も出来ないが、照明の発達していなかった江戸時代には「神隠し」が信じられていた。前触れもなくわが子がいなくなるのは狐や天狗の仕業と信じられ、警察制度も整わず携帯電話もない時代には、離ればなれになった我が子を探すのは一苦労だった。GPS対応のスマホがあればいざ知らず、江戸・明治時代には当然そんなものはない。

親たちは隣近所の人に協力してもらって鉦や太鼓を叩いて名前を呼んで捜したが、見つかるのは幸運な方で、親子が生涯めぐり逢えないかも知れなかった。迷子になっても見つけやすいように「迷子札」を持たせて、名前や住所が分かるようにしたこともあったのだろう。神田岩本町の「山内庄蔵」という人が「迷子札を二千人分作って無料で施した」という記事もある（『読売新聞』明治十一年七月十八日）。

ここにもう一人、とても慈悲深い老人が神田に住んでいた。職業は鋳金具師で神田皆川町三〇番地に住んでいたというから、現在の神田駅西口商店街が外堀通りと交わる辺りだろうか。仲間から「お供えの半さん」と綽名された「兼保半次郎」は、江戸市中だけでなく地方の神社仏閣にまで真鍮で拵えた扁額を奉納するのが道楽で、普段から身の回りの品には煙草入れの根付、火箸の頭、何から何まで「お供えの紋」を付け、その形を飾りにするほどお供え好きだった。たえず腰に金槌を差して持ち歩き、

道路に転びそうになる邪魔な石があるとこの金槌で打ち砕いて往来の安全を図ったともいう。

慈善事業を心掛けていた半次郎は明治七（一八七四）年頃、迷子になった子供を探す手段として両国橋の東側と旧万世橋（めがね橋）の南側の二ヶ所に「迷子石」を独力で建設した。これは迷子情報の掲示板で、「探す親」と「預かっている者」が子供の特徴を書いた紙を所定の位置に貼って情報のやりとりをしたものである。

これを見た通行人がまた人づてに情報を流す手段ともなった。迷子石のおかげで親子が再会できた場面がいくつもあったに違いない。半次郎が建てた「迷子石」には最後の高崎藩主、大河内輝聲（松平桂園）が揮毫している。町の鋳金具師・半次郎と最後の高崎藩主、本来なら知り合うはずのない二人の関係が不思議でならない。

時は流れて明治三九（一九〇六）年、甲武鉄道（現・中央線）の延長工事が、御茶ノ水駅から万世橋に向けて着々と進んでいた。工事に伴い万世橋（めがね橋）の架け替えも必要になったので、甲武鉄道会社は橋の際にある「迷子石」の処分について兼保半次郎の遺族と交渉した。

「取り捨て終るも名残り惜しければとて十月中に新万世橋際へ移し、幾久しく江戸時代の無警察の當時を偲ぶ記念として保存する事となれり」（『読売新聞』明治三十九年九月十九日）とあるが、今はどこへ行ってしまったのだろうか。

神田に近いところで迷子石が現存しているのは、日本銀行本店からほど近い「一石橋の袂」にある、「一石橋迷子しらせ石標」であり、東京都の文化財に指定されている。

図書館通いは私にとって金のかからない道楽であり、どうせならと古書や昔の新聞に埋もれた、神田に関する物語を少しずつ掘り起こしはじめたのがきっかけだった。歴史の教科書に載るわけでもなく、時代を動かすような大物が主人公という訳ではないけれども、先人たちが神田という舞台に泣き笑いし、紡がれてきた歴史の数々をひとつ、またひとつと見つけることができ、気がつけばかなりの数になった。

平成二六(二〇一四)年十月から『月刊 神田画報』に「すいばもんじ酔馬主水」のペンネームで「昔むかしの神田探訪」という連載を始めた。令和五(二〇二三)年十一月までの一〇九回にわたり、足かけ約九年間連載したことになる。本書はこの連載から適宜取捨選択し、あるものは全面的に書き直し、さらに、新たな未発表の原稿を加えて一書にまとめたものである。

連載中に事あるごとに、知人から「まとめて一冊にしてみたら……」とのありがたい声を多く耳にするようになったので、旧知の版元に相談したところ、原稿をまとめて提出するようにとのこと。早速に原稿の改稿作業に入り、院主兼鬼編集長に手渡したのは今年の五月二四日のことであつた。

本編を読めば解ると思うが、この地は実に進取の気風に溢れ、「初」「発祥」「元祖」だらけである。ラジオ体操会発祥の地は神田和泉町であるし(本書19)、日本で最初のアスファルト道路は神田昌平橋だ(本書20)。東京で最初の西洋料理店は慶応三年七月に神田佐久間町で開業されているし(本書34)、重量挙げ発祥の地も同じく神田佐久間町であり(本書38)、日本にウェイトリフティングの道具が初輸入される八年も前に、独学で学んだバーベルの制作を埼玉の鋳物工場いものに発注している。また、東京六大学野球で有名な慶應義塾大学の応援歌、「若き血」(本書47)を作詞・作曲した堀内敬三は鍛冶町の出身であるし、そもそも日本初の野球は神田錦町で紹介されているのだ(本書49)。

加えて、神田は東京大学や学習院大学をはじめとする一級の学府の嚆矢こうしであり、それが故にさまざまな出版文化がはぐくまれ、世界一という本の街を形成するに至っているのである。

「まとめて一冊にしてみたら……」のような誘いを真に受け、すぐ調子に乗ってしまうのも神田っ子の悪い癖で、私も例外ではなかったようだ。

最後に、素人の書いた原稿を、忍耐強い励ましと、細やかなバックアップで応援してください、武蔵野書院主の前田氏に心からの謝意を表します。